

陶芸 タタラ作りで飯茶碗作る

千葉学芸高等学校

工芸科非常勤講師

塚本 敏夫

学校名	単位数	講座数	人数／1 講座
千葉学芸高等学校	工芸 I (2 単位)	4 講座	25～35 名／1 講座

要した時間	8～10 時間
-------	---------

この授業でつきたい力
<ul style="list-style-type: none"> ・「薄い粘土の板」という大変デリケートな素材を慎重に扱うことで、手と目と細やかな神経の連動した作業を行い、作品を完成させ、より高度な達成感を得る。 ・極めて身近な存在である飯茶碗の製作を通して、「作る立場」に立って物を見ることができるようになること。 ・特殊な道具、大掛かりな装置、熟練の技術がなくても身近な道具を工夫することで完成度の高いものを作ることは可能だということを知る。

授業展開		
時間	単元	内容
1 時間	導入	飯茶碗について、茶碗の歴史、工芸文化の位置付けについて説明
1 時間	デザイン	目指すデザイン、色彩の制約、陶芸絵具の特性、アイディア作画
2 時間	成形	粘土で飯茶碗を成形する。(詳細は後述)
4～6 時間	絵付け	陶芸用下絵具で彩色
合計 8～10 時間		後日焼成して返却

観点別評価によるまとめ
作品の完成度を評価する観点
<ul style="list-style-type: none"> ・食器としてのデザインの適性 ・成形時の丁寧さ ・彩色時の丁寧さ ・口辺部の処理(滑らかさ) ・高台の接着(位置、密着度) ・机上での安定性(がたつき) ・表面の傷の有無

感想と反省	<p>焼き上がった作品を鑑賞する時間が取れないのが残念である。 さらに余裕があれば汁碗や箸などに発展させてみたい。</p>
-------	---

茶碗の成形方法について

陶芸の授業のなかで、過去に幾度か飯茶碗をとりあげたことがあった。飯茶碗は周知の通り、手に持って使う食器である。必然的に手に取った時の重量感は、御飯を口に運ぶたびに伝わってくる。つまり他の食器より軽量さが求められる食器である。手びねりの場合、どうしても厚くなりがちで、薄くしすぎると形がくずれやすくなるので薄くても6~7mmが限度であった。生乾きにして削っても素焼き後の重さが300g前後の作品が多かった。市販の飯茶碗は150~180gぐらいが多いので、およそ倍くらいの重量である。削りすぎて穴をあける生徒も少なくなかった。ひもづくり、たまづくり、電動ロクロと様々な技法を試したがいずれも一長一短で、「飯茶碗」として満足できる生徒作品はなかなかできなかった。そのなかで唯一試していない技法があった。タタラ作りである。タタラ作りは浅い皿や平面を組み合わせた幾何形体、あるいは筒形の形体向きであるという先入観があり、やや複雑な曲面を持つ飯茶碗には不向きではないかと思いついてきた。

とある時、ある窯元に伝わる陶器の下絵図集を見る機会があった。その中に、扇型の枠の中に絵柄を描いたものがあった。一目見たときは扇のデザインかと思った。しかしそれは碗型を切開いて扇型に展開した、茶碗の下絵だった。茶碗型を円錐形の下半分に単純化して展開すれば扇型になる。それならタタラ作りで扇型を作って両端を接着し、形を整えれば茶碗になるはずだ！ということでタタラ作りの飯茶碗を作る試みが始まった。

まず茶碗の大きさから扇型の大きさを割り出すことから始めた。収縮も計算に入れて割り出してみると、開いた牛乳パックにぴったり入る大きさであることが分かった。皿やマグカップなどをタタラで作る時も、水で洗える牛乳パックの型紙は重宝している。それから茶碗の曲面を整えるために石膏型を用意した。飯茶碗には、手に載せた感触に関わる微妙な曲面がある。円錐形の下半分の形から茶碗の形に変形させるには石膏型にかぶせるのが良いだろうと思い、プラスチックのボウルで手ごろなのを見つけ、石膏を流して30個余りの石膏型を作った。



牛乳パックの型紙と30cm定規



石膏型と型に使用したプラスチックボウル

使用する粘土は白信楽粘土、タタラの厚みは5mmにした。本当はもっと薄くしたかったが、これ以上薄いと成形が難しくなりそうだ。余裕があれば、意欲のある生徒には3mm~4mmのタタラを選ばせても良いかと思う。また、適正な厚みは粘土の質に大きく左右される。荒めの土の場合、授業で使用するには5mmくらいが限度かと思う。完成後の重量は平均220g前後になった。

成形－扇型の切り抜き

タタラを切り抜く前に切り糸の跡をヘラで均し、粘土をよく締めておいてから切り抜く。型紙を粘土に強く押し付けると、はがれなくなるので注意する。



成形－碗型に成形

切り抜いた扇型の粘土を石膏型の上に乗せてドベで接着する。はじめは直線状に接着する。ここでいきなり碗型にしようとするとうまく接合面が開いてしまうので、10分経ってドベの水分が本体粘土に移行してから石膏型を使って碗の形に整える。この間に高台に使う粘土をスライスしてリング状に接着しておく。2時間連続の授業なら、ここまでで1時間目が終了するとちょうど良い。



石膏型に載せて接着



接着完了、この状態で10分くらい置く

成形－高台の接着

石膏型に載せたまま、台形の上部を濡れたスポンジで少し湿らせ、台形の穴を徐々に閉じていく。この時にできるしわを、なるべく分散させながら閉じないと、ひび割れの原因になるので注意する。完全に閉じたら石膏型の曲面に合わせ、碗型に形を整える。この時口辺部は石膏に押し付けず、数mm～1cmくらい隙間を空けておく。全体を石膏に押し付けてしまうと型からはずれなくなる恐れがある。石膏型からはずし、表にして手ロクロの上に乗せる。内側を仕上げコテで均し、口辺部をなで皮で整える。ここで口辺部の形の仕上げを行う。裏返して高台の位置を確認してから高台を接着する。最後にヘラで高台の根元を押さえてしっかりと接着させる。裏に名前を彫ったら成形完了である。絵付けまでに素焼きを済ませておく。

茶碗の絵付け

デザインについての諸注意、下絵具についての諸注意



丁寧に均して電動ロクロと見紛うほどに・・・(柏南高等学校)



授業後の杖意記念撮影／千葉学芸高等学校選択美術(ゼミ形式の授業)

彩色一焼成前



210 g

226 g

195 g

235 g

209 g

完成一焼成後

(下の数値は重量)



238g

221g

215g

199g

217g

最後に

紙面の都合もあり、主に成形の部分を中心に紹介致しましたが、デザインの点をはじめとしてまだまだ改善の余地を感じています。しばしば考えるのが授業の方向性についてです。確かにいままで受け継がれてきた工芸の技法の中には授業に生かせるであろう多くのヒントがあります。しかし普通教育の中の美術工芸は職業教育ではありません。美術工芸教育の諸先輩方が目指してきた、「一般教養としての美術工芸」を普通教育の中に根付かせるということは、ひとつの理念として共有できると思います。今回の発表でこのような理念のなかに、「達成感を伴う、技術を踏まえた自己表現」という方向性がおぼろげながら見えてきたような気がします。高校生の段階で表現素材に触れておくことが重要です。そしてその先には、人口知能の発達のもたらす自動化社会の対立軸として、ますます重要性を増すであろう芸術教育があります。一般教養としての美術、工芸の存在意義は重大であると確信します。

写真協力 千葉学芸高等学校 千葉県立柏南高等学校